

1 グループ研修

①-1 「幼保小の懸け橋プログラム」を活用した幼小接続の工夫

1 各園の現状と課題

学びをつなげるための取組は、行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成まで至っていない園もある。幼児期の教育と小学校教育との接続の強化を意識し、幼保小の架け橋プログラムを活用しながら、幼児教育を分かりやすく発信をしていきたい。

2 協議内容

(1) 幼小接続の推進について

- ・ 小学校で行っていることを年長児が体験してみることで、不安の軽減につながっている。
- ・ 言葉による伝え合いを意識した振り返りの時間の充実を図っている。
- ・ コロナ前のように、小学校と交流できる機会を増やしている。負担にならないように、休み時間などを利用した交流も進めている。
- ・ 小学校と合同研修を進めたり、校内研修を聴講させていただく機会をもったりしている。

(2) 幼児教育の発信について

- ・ 小学校の先生方と顔を合わせる機会を増やしていく中で、気軽に話せる関係づくりをし、対話を通して相互理解を深めていく。
- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を手掛かりにし、幼児が活動から何を学ぼうとしているかを視覚化し、小学校に分かりやすく発信していく。

①-2 「幼保小の懸け橋プログラム」を活用した幼小接続の工夫

1 各園の現状と課題

- ・ コロナ感染症が 5 類になったことで、これから小学校との交流を進めていきたい。
- ・ 幼稚園・小学校ともに無理なくできそうなところから始めている。そのためには、園長から校長に積極的に構想を伝え、共通理解を図っている。今後は、職員同士の話し合いを充実させていきたい。
- ・ 隣接しているという立地条件を生かして、小学校を巻き込んで交流を進めている。
- ・ 小学校の先生に、幼稚園教育のねらいや発達段階等をより理解してもらうための働きかけが課題である。

2 協議内容

- ・ 幼稚園での子供たちの様子を、小学校の先生方に見ていただく機会をもつ。
- ・ 中学校区の校長が集まる会合に園長も参加させていただき、幼稚園教育や交流などについて提案したり、意見交換をしたりして幼小の滑らかな接続ができるようにしていくことも大切である。
- ・ 園長が積極的に小学校に出向き、校長と話し合う。待っていては、何も進まない。
- ・ 小学校や中学校の先生方が集まる夏の研修会に幼稚園も参加させていただく。

②-1 つながりのある発達支援教育の推進

1 各園の現状と課題

- ・ 特別な支援を必要とする園児が年々増えている。医療機関とつながっている子ばかりではない。個別の支援・指導計画の対象園児の線引きが難しい。
- ・ 書いて終わりではなく、本当に役立つ個別の支援・指導計画を作成していきたい。
- ・ 医療機関や就学相談を勧めるための保護者への働き掛けが難しい。

2 協議内容

(1) 個別の支援計画について

- ・ 学期ごとの成果と課題を保護者と共有し、次年度に生かすのが理想である。
- ・ 全ての項目ではなく、困り感が強く支援が必要な項目を中心に明記するのがよい。

(2) その他の意見について

- ・ 増加する特別な支援が必要な園児に対応できる体制を構築することが公立幼稚園の強みにもなる。
- ・ エキスパート教員を育成するための研修、発達支援の部屋の増設の必要性を感じる。
- ・ 支援が必要な園児について小学校と情報を共有することが必要である。
- ・ 今年度より設置された発達支援アドバイザーを活用していきたい。

②-2 つながりのある発達支援教育の推進

1 各園の現状と課題

- ・ 正規職員だけでなく、キッズサポーターも含め、個に応じた支援ができていないか不安がある。
- ・ 発達的な課題があるのか、愛着障害によるものなのか判断が難しい園児がいる。保護者との連携が必要である。

2 協議内容

(1) 園での取組

- ・ 巡回相談や保健師による園訪問を活用。その後、親子の心理相談につなげていった。
- ・ 忙しい保護者に対して保健師、臨床心理士につなげ、更に園で検査ができるようにした。

(2) 発達支援教育で大切なこと

- ・ 園の思いだけを伝えるのではなく、親の思いに寄り添っていく。
- ・ 義務教育につなげていくために、伝え方に十分気を配り、幼稚園で伝えるべきことは伝えたい。結論を急がせず、保護者だけでなく小学校にも丁寧に話を伝えていく。

③-1 安心・安全な園経営のための危機管理能力の向上

1 各園の現状と課題

- ・ 「安心・安全な保育」を行うためには、職員一人一人の危機管理能力を高める必要がある。
- ・ 頻発する河川氾濫・土砂災害やコロナ5類移行を受けて、園の危機管理体制を改めて見直す必要がある。

2 協議内容

(1) 職員の危機管理意識を高める手立てについて

- ・ 降園後の打合せでヒヤリハット案件を報告したり、事故発生防止委員会・研修会で情報を共有化したりして、職員の危機管理意識を高めている。今後は、情報を「見える化」するために、公立保育園で使用している「ヒヤリハット報告書」を公立幼稚園でも活用していく必要があるのではないか。

(2) 河川の氾濫・土砂災害やコロナ5類移行後の対応について

- ・ 園児を引率した避難や園内での垂直避難が難しい現状では、大雨や河川氾濫等の情報を早期に収集し、最悪の状況を想定した園長判断が重要である。
- ・ コロナ禍前の状況に戻す動きが高まる中で、幼児の安全・安心を確保するために、公立幼稚園同士だけでなく、公立保育園とも積極的に情報交換をしていく必要がある。

③-2 安心・安全な園経営のための危機管理能力の向上

1 各園の現状と課題

- ・ 遊具や園庭、プール等の安全・安心な環境整備のために、職員の意識を向上させたい。
- ・ 子供たちの命を守るための急な対応が多くなり、職員の対応能力を組織的に高めたい。

2 協議内容

(1) 遊具の安全管理について

- ・ 全職員からの情報収集と、全職員が共通理解できる取組が大切である。
- ・ 提供されたヒヤリハットの資料を参考にして各園で資料を作成し、活用したい。
- ・ ヒヤリハット事例は話し合い、職員が目にする場所に掲示すると効果がある。

(2) プールの安全管理について

- ・ プール使用前に点検表で点検し、早急に不具合箇所の対応をすることが大切である。
- ・ プール掃除を業者に頼むと非常にきれいになるため衛生的である。

(3) 熱中症への対応について

- ・ タブレットや飲料、首等を冷やす保冷剤、熱中症アラート等を活用し予防に努める。
- ・ 活動に必要な身に着ける物や送迎バス内の温度等にも気を付ける必要がある。

④-1 小規模園における幼児教育の充実に向けた園経営の工夫

1 各園の現状と課題

- ・ 小規模園でも支援が必要な子は増えている。その年齢の発達を意識した保育をすることへの不安を感じている職員もいる。焦りから教師主導、活動優先になり、個に合った指導ができないこともある。

2 協議内容

(1) 複式学級の園での取組・配慮事項

- ・ 保育活動や個の実情によって、学年単独・年少との合同など臨機応変に学級の枠を変えながら、保育をしている。
- ・ 異年齢の子供を同じ環境で保育することは、育ちの差を理解していないと難しい。園長として相談にのりながら、職員育成に努めている。

④-2 小規模園における幼児教育の充実に向けた園経営の工夫

1 各園の現状と課題

- ・ 地域的に子供が少ない。地域との関わりの中で子供を育てている。
- ・ 職員育成のために、園長も保育に参加している。
- ・ 少人数のため、コミュニケーション力が弱いのではないかと保護者が心配している。
- ・ 全園児で生活や遊びを共に行うことで、少人数ならではの保育の良さがある。
- ・ 複式学級・異年齢児保育の中で、学年の発達に合った環境や援助の工夫が難しい。

2 協議内容

(1) 人と関わる力を育てるために

- ・ 他園との交流の場や、積極的に地域に出向くことを計画している。
- ・ 同学年の子供たちと関わり学ぶことは必要であるが、小学生や中学生との関わりの中で、育つことも多い。

(2) 指導計画・週案の作成について

- ・ 人数によって指導計画を大幅に変更することはないと考えているが、その年に合った計画や次年度につなげるために工夫が必要である。
- ・ 一昨年度のプロジェクトで検討された「浜松市立幼稚園 少人数保育カリキュラム」を職員で共通理解できると良い。